

第6回: 長期のマクロ経済分析 —古い成長モデルと新しい成長モデル—

担当者: 佐々木 啓明*

*京都大学経済学研究科. E-mail: sasaki@econ.kyoto-u.ac.jp

—ケンブリッジ・モデル—

マクロ経済における利潤率 r がどのように決まるかを論じた。短期の利潤決定式

$$\Pi = \frac{pI}{s_c} \quad (1)$$

の両辺を名目資本ストック pK で割る。

$$r = \frac{g}{s_c}. \quad (2)$$

ケンブリッジ学派の人々(カルドア, パシネッティ)は, 右辺が左辺を決定すると考えた。

→ 資本蓄積率(経済成長率) g はどうやって決まるのか?

もし経済が長期的に完全雇用を達成しているとするならば、経済成長率は自然成長率 ($g_n = \text{人口成長率} + \text{技術進歩率}$) に等しくなければならない。

$$g = g_n. \quad (3)$$

以上より、

$$r = \frac{g_n}{s_c}. \quad (4)$$

というケンブリッジ方程式が得られる。

→ これは、非常に重要な意味をもっている。

—ロビンソン・モデル—

ロビンソン・モデルでは，成長率が内生的に決まる．

(2)式を変形し，これを貯蓄関数と解釈する．

$$g_s = s_c r. \quad (5)$$

次のような投資関数を導入する．

$$g_i = \alpha + \beta r. \quad (6)$$

均衡では貯蓄と投資が等しくなる．

$$g_s = g_i. \quad (7)$$

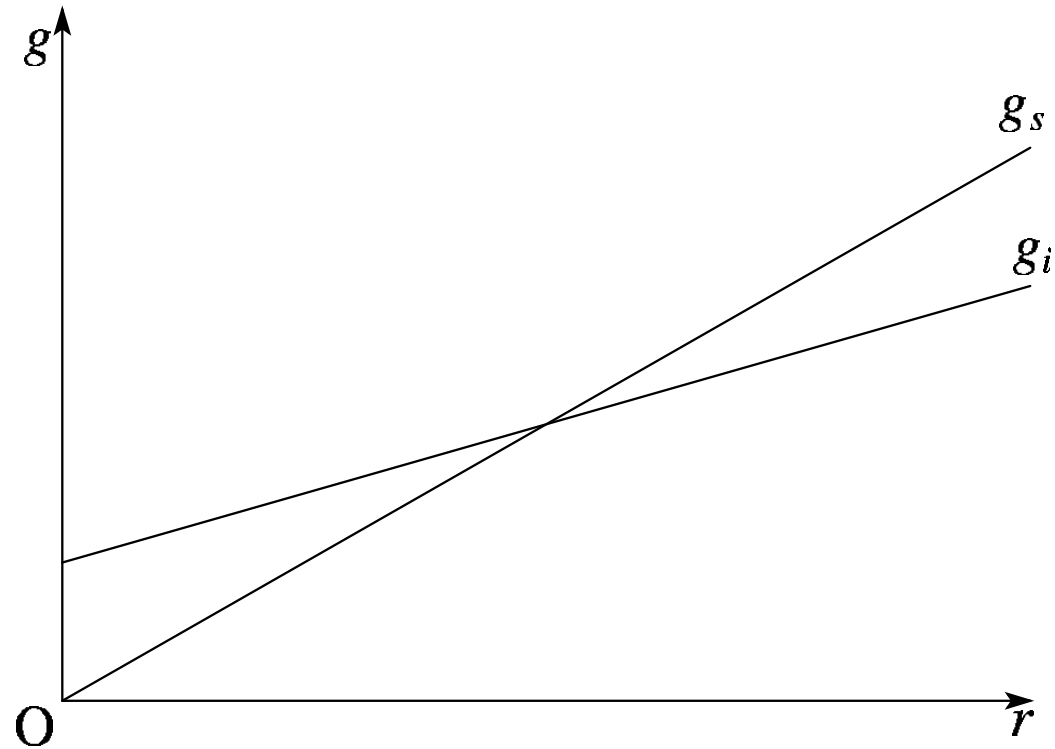


Figure 1: ロビンソン・モデルにおける均衡の決定

1. 資本家の貯蓄率が上昇するとどうなるか？
2. 企業が強気だとどうなるか？

—ロビンソン・モデルの背後で生じていること—

国民所得の定義式.

$$pY = wN + rpK \implies 1 = \frac{wN}{pY} + \frac{rpK}{pY}. \quad (8)$$

ここから、次の関係式が得られる.

$$\frac{w}{p} = T \times \left(1 - \frac{r}{u_n}\right). \quad (9)$$

労働生産性 T と標準稼働率 u_n が一定ならば、利潤率が上昇すると実質賃金は低下する.